遊船（屋形船）では、実際に鵜飼を間近で見ることができます（有料）。詳細は、市ホームページ（右記二次元コード）をご確認ください。

鵜は、長いクチバシとエメラルドグリーンの目が特徴です。鵜は決まった場所に留まったり、「カタリアイ（2羽でペアを組むこと）」で行動したりする習性があります。

水郷日田の鵜飼

◆水郷日田の鵜飼の始まり

三隈川で鵜飼が行われるようになったのは、今から400年以上前。安土桃山時代に派遣された代官が、岐阜県の長良川から鵜匠を招いて鵜飼をさせたことが始まりと言われています。

明治時代の終わり頃からは、遊船から鵜飼を見物する川遊びが盛んになり、夏の夜の風物詩として定着するようになったと伝えられています。

◆鵜匠、棹差（さおさ）し、鵜の見事な連携プレー

鵜飼にはいくつかの技法があり、日田の鵜飼では、鵜匠、鵜、棹差しの3役が協力して漁を実施。鵜匠が6羽の鵜を扱って漁を行い、棹差しと呼ばれる船頭は、舟を竹棹で巧みに操り、鵜飼をサポートします。

◆鵜飼が行われる時期

毎年5月20日から10月末までの間、三隈川の日田温泉街付近で行われています。見事な綱さばきで鵜を操る鵜匠の技、川面を美しく輝かせるかがり火の灯り、提灯を揺らす遊船、その全てが織りなす幻想的な光景が広がります。

日田の鵜飼が直面する、深刻な後継者問題

遊船の利用客の減少などによって、日田の鵜飼は鵜匠や棹差しとして生計を立てていくことが困難となりました。

鵜匠や棹差しのほとんどは、世襲で先祖代々継承してきました。約30年前は7人いた鵜匠も高齢になるとともに一人、また一人といなくなり、現在は2人のみ。400年以上の伝統を紡いできた日田の鵜飼は、現在、存続の危機に直面しています。

市では、この貴重な文化財を守り遺していくため、鵜飼の保存継承に掛かる経費に対し補助金を交付しています。また、鵜飼の普及啓発のため、小・中学生や高校生を対象とした「鵜飼授業」や、市民を対象とした「ふれあい宅配講座」も行っています。その他、少人数での鵜匠へのインタビューや鵜小屋の見学などを希望する人は、下記担当課にお問い合わせください。

■鵜飼授業に関すること
文化財保護課文化財管理係
☎㉔7171（市役所別館2階）

■ふれあい宅配講座に関すること
社会教育課生涯学習推進係
☎㉒6868（アオーゼ1階）

①

【鵜匠にインタビュー①】
西尾和弘さん（64歳／鵜匠歴43年）

「鵜と一緒に育ったので、鵜匠を継ぐのは当然のことだった。鵜飼は、自然の川と生き物が相手だから、43年経った今も毎日精進。鵜は触れ合えば触れ合うほど賢くなる、いわば“しつけができる利口な鳥”。初めは火や棹を怖がるが、次第に、鵜の方が覚えて漁がやりやすくなる。ときには、噛みつかれることもあるが、毎日鵜の顔を見て、触れ合っていればおのずと信頼関係ができてくる。正直、大変なことばかりだが、代々受け継いできたこの伝統を何とかつないでいきたいと頑張っている」

②

【鵜匠にインタビュー②】
黒木俊吾さん（50歳／鵜匠歴16年）

「妻の家系が代々鵜匠をしていて、後継者不足から継ぐことになった。仕事を終えてからの鵜飼や、日々の鵜の世話は苦労も多いが、鵜匠の先輩である西尾さんの背中を見て勉強している」